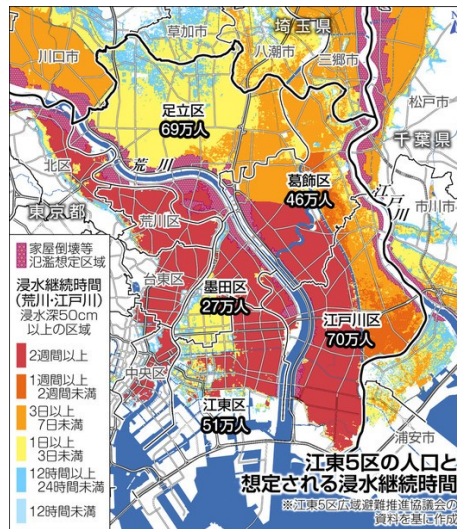


東日本大震災以後の備忘録ないしは切り抜き帳(その87)

[2018年8月22日(水)]

○本日の東京新聞夕刊の1面トップには『江東5区「水害で2週間以上浸水」250万人域外へ避難計画』と題する記事が掲載されていた。「海拔ゼロメートル地帯が広がる東京都東部で大規模水害時の対応を検討してきた「江東5区広域避難推進協議会」は22日、浸水が想定される区域図と避難計画を示した。水が2週間以上も引かない地域が発生する、との想定を初めて公表。高層階に逃れてもライフラインの断絶で生活は困難になるため、人口の9割以上に当たる250万人を隣県などに広域避難させる方針を打ち出した。だが、具体的な避難先は示されていない。(署名記事) 浸水想定区域図は、長時間の豪雨で荒川と江戸川が同時に氾濫し、巨大台風による高潮も起きるという最悪の事態を想定している。その結果、墨田、江東、足立、葛飾、江戸川の5区の9割以上が浸水。海拔ゼロメートル地帯で海面や河川の水面より低いいため水が抜けにくく、2週間以上浸水する人口は100万人とした。協議会は広域避難勧告を発令する基準を独自に設けた。台風予報や雨量予測などを基に、川の氾濫の3日前から5区で検討を始め、2日前から順次、浸水区域外への広域避難を呼び掛ける。計画では、建物の上階にとどまる「垂直避難」は勧めていない。浸水が長く続けば、電気、ガス、水道などの供給や食料が途絶える恐れがあるからだ。このため、移動が難しい高齢者らを除き、自宅に居続けず広域避難するよう求めている。しかし現時点でこの事態を想定した公的な広域避難場所は確保できておらず、計画では「各自で確保した親戚や知人宅などに避難を」との呼び掛けにとどまっている。協議会の座長を務める江戸川区の多田正見区長は、同日開いた記者会見で「避難先となる地域とはもちろん、道路や交通、警備などの各機関とも調整しなければならない」と述べた。5区は2015年10月、大規模水害での犠牲者ゼロを掲げ、避難対応の検討を始めた。東京大学大学院の片田敏孝特任教授が協議会のアドバイザーを務めている。」

○同紙の社会面にも『どこに逃げれば… 江東5区水害避難計画 住民「域外」に戸惑い』と題する関連記事が掲載されていた。「一体どこに逃げればー。西日本豪雨の記憶も新しい22日、東京都東部の江東5区(墨田、江東、足立、葛飾、江戸川)による協議会が示した大規模水害広域避難計画は、最悪の事態には250万人に区域外への退去を呼び掛ける方針が盛り込まれた。高層住宅の住民も例外ではない。逃げる先の確保は各自に任せられ下町の住民に困惑が広がっている。(署名記事)「万一に備えて食料を備蓄するつもりだが、長期間孤立すれば心身共に持ちそうにない」。江東区南砂の14階建てマンションの7階で夫(78)と暮らす渡辺秀子さん(81)は、自宅近くでは浸水被害が2週間以上続くという想定を聞き、ショックを隠せない。軽度の糖尿病で、薬が切れる不安にもおびえる。7階までは水は到達しそうもないがライフラインが途絶える恐れから、原則、協議会は区外への避難を呼び掛ける。だが渡辺さんには、水没の危険性がある江東区北砂のマンション1階の長男宅以外に身を寄せる場所はない。北砂の15階建てマンションの12階に住む女性(69)も「近くに避難できる親戚宅などはない。万一の際は腹をくくるしかない」と話した。「受け入れ先が決まっていなのに、避難しろと言われても、どこに行けばいいのか」。一軒家が多い葛飾区東新小岩7丁目町会の中川栄久会長(82)も、協議会の広域避難の方針に戸惑いを見せた。想定では、7丁目は3メートル以上の浸水が2週間以上続くと言われた。中川さんは「広域避難は理想だが、現実的ではない」と大変さを口にする。町会では8年前、大規模水害を想定した訓練を独自に実施し、150人で、隣接する千葉県松戸市に電車と徒歩で避難を試みた。だが、車いすが通れない箇所があったり、途中でトイレに行く人がいたり、苦労が多かったという。そうした経験から町会は、足の悪い高齢者らが高い建物にとどまる「垂直避難」のケースも出てくると分析。助けに行ったり、物資を届けたりできるようにエンジン付きのゴムボートを2隻購入し、水に浮かべて定期的に訓練してきた。中川さんは協議会に対し「まずは、どこに避難すればいいのかを明確にしてほしい」と求めた。」



ゴムボートを使った避難訓練の様子を説明する中川栄久さん＝東京都葛飾区で

[2018年8月25日(土)]

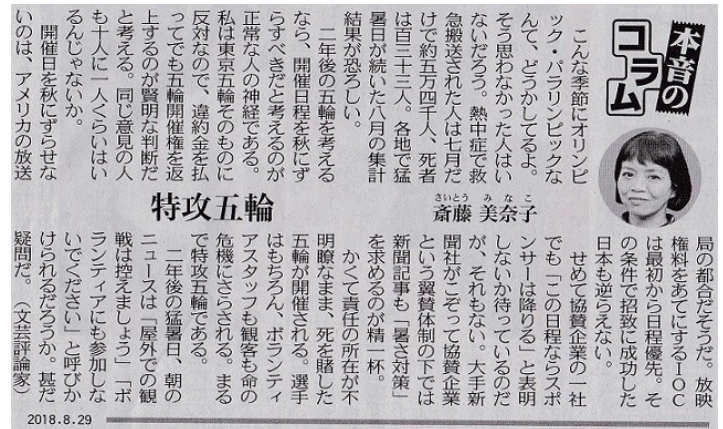
○朝日新聞デジタルが8月20日に発信した、『【系譜】首相退陣・自民離党、挫折から再挑戦の2人』の一部を、以下に転載させて頂きたい。「安倍晋三首相と石破茂氏。その生い立ちと政治キャリアからは、2人の政治家の共通点と違いが浮かび上がる。安倍氏は1954年、東京生まれ。父は後に外相、自民党幹事長などを務めた安倍晋太郎氏、母は岸信介元首相の娘・洋子さんという、華麗なる政治一族だ。次男ながら、幼い頃から政治家を志していた。小学校から大学まで東京の成蹊学園で過ごし、神戸製鋼で3年半の会社員生活を経て父・晋太郎氏の秘書となる。1991年に晋太郎氏が亡くなり、1993年の衆院選で初当選した。2000年に森喜朗内閣の官房副長官に登用され、小泉純一郎内閣まで3年務めた。拉致問題への取り組みで注目され、2003年に自民党幹事長、2005年には官房長官に。2006年に小泉氏の後を継ぎ、戦後生まれで初、戦後最年少の52歳で首相になった。だが、一度目の首相の座は不本意な結末を迎えた。閣僚不祥事や、年金問題などで支持が急落し、2007年7月の参院選で大敗。続投したが9月に病気を理由に退陣した。約1年での突然の退陣が、2009年の自民党下野の引き金を引いたと、党内で批判を浴びた。自民党が野党だった2012年に、総裁選に再挑戦。地方票で石破氏を下回ったが、議員票のみで決まる2回目の投票で逆転し、総裁に返り咲いた。現在、好調な経済を推進力に、第1次内閣と通算で戦後歴代単独3位の長期政権を維持する。政策や思想の面で、岸氏の影響を強く受ける。岸氏が、日米安全保障条約改定に政治生命をかけたように、首相は集団的自衛権の行使を容認する安全保障関連法を成立させた。そして今、岸氏が成しえなかった憲法改正を掲げて総裁選に臨む。趣味はゴルフ。夏休みは、知人らを招いて別荘で連日興じるほか、政治のツールとしても重視する。岸氏が1957年に渡米した際、当時のアイゼンハワー大統領とゴルフをしたように、昨年の訪米時以後、通算3回、トランプ大統領とプレーして蜜月ぶりをアピールした。一方の石破氏は、1957年に鳥取で生まれた。鳥取大学教育学部附属中学、慶応義塾高校、慶応大を経て旧三井銀行に入行。鳥取県知事、参院議員などを務めた父・二郎氏の死後、二郎氏と親交が深かった田中角栄元首相に背中を押されて政治家の道へ進んだ。田中派の職員を経て、1986年7月に旧鳥取全県区で初当選し、以後、連続当選11回。政治改革をめぐり1993年に宮沢内閣の不信任案に賛成。無所属で衆院選を戦い、後に離党。新生党、新進党に所属した。「青い鳥はいない。自民党から変えていかなければならないと思った。挫折感は大きかった」と振り返る。1997年、自民に復党し、2002年に防衛庁長官で初入閣。「政治的に対立する立場だった」とする小泉純一郎元首相が自らを登用してくれたことに「人事はかくあらねばならないと思った」と言う。防衛相も務め「国防族」の印象が強いが、本人は「本業は農林水産」と自負する。政治家になる前、渡



辺美智雄元副総理の講演で聴いた「政治家の使命は、勇気と真心をもって真実を語ること」が信条だ。「師」と仰ぐ田中氏から受けた「選挙は歩いた家の数、握った手の数しか票は出ない」との教えは、今も自らの選挙哲学とする。2008年、2012年の党総裁選に立候補。第2次安倍政権では、幹事長、地方創生相を務め、2015年9月に「水月会」(石破派)を旗揚げした。鉄道やプラモデル、キャンディーズなど1970年代アイドルに一家言持つほか、クラシック音楽も好む。議員会館の自室は、防衛関係の書籍が並び、ミニ軍事図書館の様相を見せる。料理、洗濯も好きで、自作のカレーに自信を持つ。妻の佳子氏は大学の同級生で「愛妻家」を自認する。(署名記事)

[2018年8月29日(水)]

○今朝の東京新聞に掲載されていた斎藤美奈子氏のコラム『特攻五輪』を右に転載させて頂くが、筆者も全く同意見である。ついでに述べさせて頂くと、最近のテレビ番組等に見られる商業主義には目に余るものが多すぎる。番組が粗製乱造のくせに、視聴者を無視するかのようにコマーシャルが不躰にしかも繰り返し飛び込んでくる。ひと昔前はこれほど酷くはなかったと思うが。政治に品性がなくなると、社会全体に品性がなくなってしまうのかも知れない。いささか心配になってくる。



本音のコラム

こんな季節にオリンピック・パラリンピックなんて、どうかしてるよ。そう思わなかった人は、急搬送された人は七月で約五万四千人、死者は百二十一人。各地で猛暑日が続いた八月の集計結果が恐ろしい。

二年後の五輪を考えると、開催日程を秋にずらすべきだと考えるのが正解な人の神経である。私は東京五輪そのものに反対なので、違約金を払ってでも五輪開催権を返上するのが賢明な判断だと考える。同じ意見の人も十人に一人くらいはいるんじゃないか。

開催日を秋にずらすのは、アメリカの放送局の都合をうた。放映権料を定めて以降は、最初から日程優先。その条件で招致に成功した日本も逆らえない。せめて協賛企業の一本でもこの日程ならポテンシャルは降りる」と表明しないか待っているのだが、それも無い。大手新聞社がこぞで協賛企業という翼賛体制の下では新聞記事も「夏対策」を求めのが精一杯。かくて責任の所在が不明瞭なまま、死を賭した五輪が開催される。選手はもちろん、ボランティアスタッフも観客も命の危機にさらされる。まるで特攻五輪である。

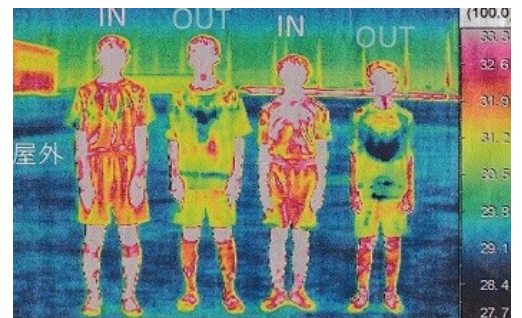
二年後の猛暑日、朝のニュースは「屋外での観戦は控えましょう」「ボランティアにも参加しないでください」と呼びかけられるだろうか。甚だ疑問だ。(文芸評論家)

2018.8.29

[2018年8月30日(木)]

○今朝の東京新聞筆洗を以下に転載させて頂きたい。「世界には日本語に翻訳しにくい言葉がある。カリブ・スペイン語の「コティスエルト」。この一言で日本語にすれば「シャツの裾を絶対ズボンの中に入れようとする男の人」という意味になるようだ。『翻訳できない世界のことば』(創元社)で見つけた▼だらしのないなどの悪い意味ではないらしい。「人生も着るものもリラックス」した人。そんな前向きなニュアンスがこの短い言葉には含まれているようだ▼シャツの裾を入れるべきかどうかをめぐって、前橋市内の中学校の先生がおもしろい実験を行ったそうだ。体操着の裾を入れた生徒と入れない生徒に運動してもらい、その後の体温を調べたところ、裾を入れない生徒の体温の方が4度低かった。そんなに違うものなのか▼実験結果を受け、この先生は、夏の運動時などは体操着の裾を出した方が良く、指摘している。猛暑だったこの夏を思えばもっともな話で、熱中症対策に一役買うだろう▼かつてシャツの裾はズボンに入れなさいと教えられた世代だが、1990年代に入れなかった派が次第に拡大していった印象がある。最近ではむしろ入れる方が少数派で、見かけるのはゴルフ場ぐらいか▼ちまたの傾向がそうであるならば、体操着の裾も柔軟に対応した方が子どもたちの夏の運動をより楽にするだろう。大切なのは行儀よりも身体である。「コティスエルト」は悪くない。」

上の写真は、同じく本日の東京新聞夕刊社会面に掲載されていた『体操着 裾出すと4度涼』の記事から転載させて頂いたもので、“IN”は裾を入れた生徒，“OUT”は裾を出した生徒とのことである。因みに「コティスエルト(cotisuelto)」を普通の辞書で引くと、cota(衣、ブラウス)とsuelto, ta(だぶだぶの、ゆったりした)とあって、上記のような深い意味があるとは想像できなかった。



2018年8月30日

文責：瀬尾和大